

北 どころ

第117号 2025年12月1日（毎月1日発行）



前方が開けた田園でのんびり寛げる



赤川の下流域なので川原には丸い石が多い

きすき
木次線ストロール⑩

はたや
幡屋駅

「たたたら製鉄の痕跡と 諏訪から里帰りの神」

11月16日日曜日、午前8時40分頃、車で庄原の自宅を出た。朝晩の冷え込みで周囲は深い霧の中、ライトを点けて走った。まるで山水画の中に迷い込んだような気分だ。

徐々に霧が晴れてくると、紅葉した彩（いろどり）の世界が見えてくる。山々は晩秋の景観だが、刈り取られた稲の切り株からは葉

（ひこばえ）が青々と伸びている。それも標高がどんどん上がるにつれて次第に黄葉して、真っ青な空の下、渓谷沿いの山の中を走行する。

（す）いな……）
圧倒されていた。長引いた残暑からの急激な冷え込みで、紅葉の山景としては今が最高の時期なのだろう。カメラや三脚を抱えた人

影がチラホラ見える。

訪問した赤川の川原を目指したが、どういわけか水位が上がってカモの群れが泳いでいる。庭木に水やりをしていた人に尋ねると、堰の鉄板が自動で開閉するのだという。ここしばらく雨が降っていないので、堰が閉じて水位が上がっている。防火用水も担っているの、ある程度の水位を保つ必要がある、とのこと。

前回で採取した石が鉄滓（てっさい）ではなかったため、元の川原に戻すつもりが、川面に投げ込むことになってしまった。近くで

農作業をしていた人に、不法投棄ではない理由を説明してから投下。

出雲大東駅の駐車場に車を停めた。日曜日なので、駅の構内の飲食店も出札窓口も閉じている。少し早いですが、ホームのベンチで待つことにした。持参した文庫本を読む。熱中しているうちにホームのベルが鳴った。客車が2両で、観光客でかなり混んでいる。運賃を用意しておこうと、運転席横のモニターを見てようやく気づいた。準備後落合方面の列車に乗ってしまった。

190円の料金を支払って南大東駅で降車。携行のぶどうパンで簡単な昼食。11時58分発（実際は15分遅れ）の宍道行に乗る。結果オーライで、予定の列車に乗ることができた。出雲大東駅からは赤川沿いの線路を走り、10分足らずで幡屋駅に到着。料金は190円。地方のローカル線では致命的なミスだが、少し長く列車に乗り、ほんのちよっぴり売上に貢献することができた。本を読むので待ち時間は少しも苦にならない。

南大東駅と同じで駅舎はなく、屋根のある簡易な待合室があるだけ。以前は木造の駅舎があったようだが、平成6年に解体されて現在の停留所（待合室）が作られた。待合室の後ろに広い空地があるので、おそらく駅舎があった跡地な

のだろう。大正7年簸上鉄道の停留場として新設、同10年停車場(駅)として認可される。昭和9年簸上鉄道が国有化されて木次線の駅となる。

木次線恒例の出雲神話にちなんだ駅の愛称は「大原郡家(おおはらぐけ)」。解説板によると、この辺りは広い大きな原だったので大原郡と名づけられ、駅前には郡家(郡役所)跡がある。その北西に諏訪神社があり、健御名方神(たけみなかたのかみ)をお祀りしている。大命の御子神で、国譲りの時、健御雷神(たけみかずちのかみ)に敗れ、諏訪湖のほとりまで逃げ、そこに鎮座されたと伝えられている。

ホームの前は広々とした水田で、今は刈り取りも終って乾いた土と切り株が見



赤川の川原で採取した金屎(鉄滓)



雲南市大東町仁和寺にある諏訪神社(楼門前で撮影)

えている。田んぼのさらに向こうに赤川がある。駅前の道を線路沿いに歩いて県道25号線(玉湯吾妻山線)に出て、川の堤防を下って川原に降りた。下流で堰が上がっているのだから、水の流れが止まっている。水量が多い場所で、カモや白鳥の群れが悠然と泳いでいる。「あつたー」

穴ぼこだらけの黒い石だ。裏側に熔けたような痕がある。茶色味を帯びているのは錆だろうか。持ち帰って、地元の郷土史家の方に確認してもらったのだが、鉄滓に間違いないと太鼓判を押してもらった。砂鉄から鉄を採取したあとの残渣で、たたら製鉄が行われていた証左である。赤川という名前も、鉄穴(かんな)流しの濁った水が川に流入したのが由来

だと推察される。

駅前の道に戻って、解説板に書いてあった諏訪神社を目指した。畑の畔に植えてあるコスモスが満開で、ピンクの濃淡の花が揺れている。駅の裏手の丘に古い鳥居を見つけたのだが、神社の名前が記されていない。石段の参道を上って行くくと立派な楼門、さらに石段を上ると本殿の前に出る。社務所に「諏訪神社」の文字を見つけてホッとす。

今回の取材旅行の無事を祈願した。まるで残暑がぶり返したような陽気で、帽子を忘れてきたので全身汗だくだ。足腰の痺れや痛みがひどくて、歩行が長続きしない。今日は松江で一泊、明日は「一畑電車」を取材する予定。完走できるだろうか？

樹齢300年を超えると言われるスダジイの巨木の陰でしばし休息、最後の目的地である「仁和寺」をスマホのマップアプリで呼び出した。「にんなじ」と読む。諏訪神社を含むこの辺一帯の地名でもある。

アプリを頼りにそれらしきお寺に到着したのだが、寺の名前がどこにも見当たらない。境内に人気はなく、どこことなく荒れた雰囲気。参道の入り口にいた高校生(?)の男子に尋ねると、仁和寺に間違いないという。無住寺になって久しく、仏事が行われることもほとんど

どないらしい。真言宗御室派の総本山である京都の仁和寺の末寺という話もあるのだが、栄枯盛衰の理(ことわり)か。

幡屋駅に行く道を尋ねると、駅に行く用事があるので案内してくれるという。杖を頼りにモタモタ歩くわたしに、自転車を押して同行、爺さんの話題にも懇切丁寧に付き合ってくれる。カンカンという踏切の音が響いた。

「列車が来ますね」

「間に合いそうにないかな……」

歩くのが限界だった。ホームに入る列車が見えた。

「待ってもらうようお願いします」

自転車を押す足を速めて駅に到着、交渉が成立したのか、運転手さんがホームに立ってこちらを見ている。彼が手招きしながら大声で叫んでいる。これ以上は速くは歩けないと内心、抗議したが「ゆっくりでいいですよ」と言う声が聞こえた。どうにか列車に乗ることができたが、乗車時の階段でガクンと膝が折れて冷や汗が出た。列車が発発、恩人に向かって手を振って頭を下げた。出雲には現在も神様がいます……。



「ミイラ」

高柴順紀 (菊栽培農家)

ずいぶん昔のことだが生け花の先生から、曲がつて虫のかじった葉っぱの菊が欲しいと言われたことが忘れられない。常に葬儀需要に特化した直立し、虫も病斑も無い菊しか頭になかったので正直困った。

言われてみれば中国の水墨画に見える菊もそのとおりで、自然らしさ

を表現したい先生の素直な気持ちからの話であったのだと思う。でもわくらば(病葉)などと言う詩的な世界を目指してはいないので、嫌われる農薬に頼って菊栽培して来たのが私の姿と言えようか。

こんな日常ではあるが今年の秋、ハウスの中にダイコンの種をまいて



ダイコン葉裏のアブラムシとマミー (ミイラ)



ダイコンアブラムシ (右) とゾンビ化したマミーの姿

無農薬に挑戦しました。しかし写真のように冬のハウスの中とはいえ何処から来たのかアブラムシが葉っぱの裏にいっぱい付いているのです。やむなく粘着テープに着けて取り始めたのですが、中に少し赤みがあった妙な虫が混じっていたのです。早速昆虫に詳しいYさんに見てもらおう。

「ああ、これはマミーじゃね」

「マミーって何ね？」

「アブラムシのミイラのことですよ」

「どうやらアブラムシに寄生する小

さな蜂のせいらしく、アブラムシとは到底言えないグロテスクな姿なのです。昆虫世界での寄生

蜂の話は書物などでは知っていましたが、身近で教えてもらって見るのは初めてでした。濡れたハウスのビニールにそれらしき蜂も着いていたので採取も出来ました。専門家から見ると大抵の昆虫にはそれぞれの寄生蜂がいるらしく、珍しい事例では無いようでした。それにしても、生みつけられた卵が生きたアブラムシの中で成長を続けるのです。そして表皮を

衣にして過ごし、背中からふたを開けて飛び出すのですが、残されたのは見るも無残な育ての親のミイラ姿です。菊栽培では憎き害虫として防除に精を出して来ましたが、自然界では生き物同士が相互に関係を持ちながら豊かに生きていることを改めて知らされました。大きくなりつつあったダイコンを外側の雪の中に捨てるハメになりました。自分には有機農法とか無農薬農業は出来そうにありません。

ところでミイラは英語で mummy と書き、イギリスでは子供たちはお母ちゃんと呼ぶのにマミーと言うそう。同じ綴りだからミイラ、ミイラと呼んでいるのかなあ。ところで日本ではなんでミイラと言うのでしょうか。気になります。なんとポルトガル語でカステラなどと一緒に南蛮貿易で入ってきた言葉だとか。漢字で書くとも木乃伊なので普通には読めないし書けません。これは中国での表現をそのまま使ったのでしょうか。

本誌の先月号を読むと、広島県立美術館で「特別展・古代エジプト」が開催されたようですが、広島に行かなくてもミイラが見られました。

ハロー注意報②④

——進駐軍がいた町のはなし

逞しき仕事人たち 松岡初枝

商店街の歳の暮れはどの家も大忙しである。各店のおじさんおばさんは、師と呼ばれるような人ではないが、まさに走り廻って働いていた。

お向かいの畳屋は十一月頃から畳の表換えの注文が増えるので、注文主の家へ出張する人と店で仕上げる



八百屋のおにいさんの引き売り姿

人と手分けて仕上げてゆく。おじさん自慢のオート三輪がフル稼働していた。おばさんは大量のおにぎりを作って職人さん達の弁当に持たせるので、朝は暗いうちから大釜で飯炊きをする。コンビニなんて無い時代だから大変だ。お茶は出張先で出してくれたから、昼食を挟んで働きづめだった。

左隣の燃料屋は炭や練炭、豆炭、薪などの配達、リヤカーを引くおじさんの顔はいつも黒ずんでいた。

右隣の玩具や雑貨を売る店は、障子紙や半紙、チリ紙やポチ袋が飛ぶように売れる。おじさんは配達、おばさんは店番、私達が正月に遊ぶトランプやかるたも売っていた。

八百屋のおばさんは店売り、おじさんは白菜を籠に入れて配達しながらサーブスで漬け込んでくれる。おじさんが漬けた白

菜はとてもおいしかった。いつもは祖母が漬けているが、正月前は忙しいので八百屋のおじさんが漬けてくれた。「おじさんの白菜漬け、おいしいね」と言う祖母がムツとする。優しい祖父は「おばあちゃんのが一番さ!」と言って皆が笑う。祖父のフオローは天下一品だった。

三軒ほど先の肉屋のおばあさんは、特別級の技の持ち主だった。肉屋の大仕事である正月用の鶏肉の仕込みをするのがおばあさんの腕にかかっているのだ。いつもの店売りの鶏も仕込むが、何と言っても正月前は捌く数が何倍も多い。この地の雑煮は所謂江戸雑煮、菜(な)鳥雑煮で、肉は鶏、大根、人参、里芋、小松菜、鶏ガラスープと鰹節と昆布の合わせ出しの醤油味。雑煮の主役の鶏肉は無くてはならないので、勢い多くの鶏が肉屋のおばあさんの手によって昇天するのだ。

早朝、養鶏農家から生きた鶏が籠に入れられて届く。「コーコッココッコ」鳴き声が響いている。「あー、今日は鶏を捌く日だー」私は少しの興味と大きな怖さでドキドキする。一度だけそーっと見に行ったら、店の裏にある作業場には大釜で湯が沸いている。鶏を一羽づつ絞めて首を切

り、釜に漬けてすぐに取り出す。羽を塗りやすくするための作業だ。この一連の作業がおばあさんの役目、そこから先は息子である若いおじさんが仕上げる。昭和の時代スーパーなどの無い頃は、こんなワイルドな作業も店が自分達で行っていた。「食べ物をお大切に、命を頂くだからね」と言われなくても、この目で見た作業現場は動物達の命が食べ物になってゆく様子そのものだった。

祖父は昼頃、すっかり仕上がって店先に置かれた丸鶏の中から一番良さそうなのを選んで「夕方まで捌いてね」と注文する。届いたらすぐにガラでスープを作る。正月、「おじいちゃん、昨日の朝は生きていたのに…でも食べ物になっちゃった」「そうさ、どんな肉でも魚でも生きていたんだ。だから残さず食べるのが供養というものさ…」

街は酒屋に届く酒樽、味噌樽、醤油瓶のガチャガチャという音、豆腐屋のラツパ、電気屋の店先にはテレビが置いてあり、人々が群がっていた。

こんな商店街の中でも特別な存在だったのが「ビアホール」だった。ビアホールはアメリカ兵達の憩いの場所だった。将校達は「将校クラブ」



パン屋のエイコちゃん（左）



写真館のスタジオで弟と私
（おじさんが亡くなる直前撮影）

があり、兵達は入れない。街のビアホールはクリスマスには盛大なパーティが開かれ、一晩中大騒ぎしていた。この店のママさんは、ちょっと前まで夫が営む写真館の奥さんだったが、夫の急死から間もなく米兵相手の酒場を始めた。ママに言わせると「清水（きよみず）の舞台から飛んだつもりで始めたの」。何の手に職も無い主婦の一大決心だった。数人の若い女性を雇い、昼は英語のできる人から簡単な会話を習い、若い息

子がバーテンダー、あとは度胸と笑顔を頼りの見切りの開店だったが、これが当たりの大盛況、正月以外の年中無休のビアホールは、日米入り乱れた客でいっぱいだった。ママさんが我が家の店に来ると、祖母や母、店のおねえさん達に多くのチップやチョコレートを置いていってくれる。「ママさん、いいのかい、こんなに気前良くしちゃってさあ」と祖母が言う。「いいのよお、私も米兵から沢山チップ貰ってんだ

から。あの人達ったら国の母を思い出すなんて言ってる、人間皆一緒なのよお。」「そうなの、リチャードさんも母に優しくかったものね」。国の異いはあっても人の心は変わらないし、母への思いは万国共通なんだと言うママさんは、写真館の奥さんの頃よりもずっと若々しく輝いていた。ここにも逞しい女の姿があった。

くの人が昼の疲れでグーグー寝て待っている。豆腐屋さんは油揚げやガンモドキの匂い、肉屋さんはコロツケやトンカツの匂い、魚屋さんは少し生臭い。皆それぞれの商売の匂いを身にまとってコックリコックリ、自分の番が来るまで寝て待つのだ。新年が明けてもまだ長い一日は終らない。いつも最後のお客となるのは寿司屋のおばさんだったが、残った寿司飯でカンピョウ巻きを作って来てくれる。疲れた店のおねえさん達は嬉しそうに御馳走になっていた。

もうあんなに活気のある歳の暮れが戻ることは無いだろう。今の時代、何でもかんでもスマホやパソコンを使い指一本で注文できてしまう。置き配が届き、買い物だって大型スーパー一軒で間に合ってしまう。街は人通りが減り、夕方の暮れの街は車ばかりが行き交っているが、あの生き生きとした生活そのものの音や匂い、人々の話し声、商人達の走り廻る姿が消えてしまった。私は昭和の街の働く人々、仕事をする人達が大好きだった。祖母や母が縫ってくれた綿入れ半纏と同じような、ほっこりあたたかな体温を感じられる街の姿が懐かしい。

県道から林道に入るところに、「森の古本屋」という手作りの看板がある。今朝は霧が深いので、車のヘッドライトが照らさないと文字が読み取れない。落葉に埋まった林道に入ってしばらく進むと、溪谷沿いの道に出る。流水の音を聴きながら、車一台が通るのがやっとの隘路を登って行くと、森島家が見えてくる。

実家の農家だった平屋の古民家を、アキラさんが自力でリフォームした。限界集落を超えて、無人の廃村になってしまった期間が長いので、ガスや水道、電気といったライフラインが遮断されてしまった。ガスはプロパンガス、沢の水を引いて、電気はソーラーパネルと蓄電池を利用している。ただし、蓄電できる量には限りがあるので、夜の明かりは灯油ランプを使ったりして節電している。

アキラさんと一緒に、軽バンの荷台から古本の入った段ボール箱をいくつか降ろして、台所のある土間に運んだ。以前は本当に土の床だったが、コンクリートで舗装して珪藻土のタイルを敷き詰めている。

森島夫妻は、うちの古本屋の常連客だった。

「本に囲まれて過ごせるなんていい

わね。ワタシ、本屋さんになるのが夢だったの」

奥さんのヨーコさんが言った。

「だったら、やってみたらどうですか？ 自宅でもできますよ」

「おいおい、山の中の一軒家だぞ。開店しても、タヌキやキツネが来るだけさ」

「それもいいわね」

アキラさんが苦笑を浮かべた。

森の古本屋

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑩7

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「ネットで販売すればいいんですよ。本を登録しておけば、向こうの方から探してくれます。フリマサイトなら会員になるのも無料ですし、売れたら手数料を払えばいいので、初期費用はかかりません」

正直、古本の引取り依頼が多くて困っていた。倉庫に使っている部屋が満杯で、今はすべて断っている状況だった。捨てるのが惜しいので、

タダでもいいので引き取ってもらいたい……、みんな同じ言葉を口にしている。

じゃあ、やってみようかというところで、うちで引き取った本をまわすようにした。ネットで売れないような本は、自宅の本棚に並べるようになる。どうせなら、古本屋の看板を掲げてみよう。アキラさんお得意のDIYで店舗の体裁を整えた。遊び

心だったが、森の中の古本屋としてユーチューブで紹介されて、わざわざ訪ねて来るお客が出てきた。今ではカフェスペースも設えて営業している。

「もう出しているんですね」
畳敷きの和室の中央に、コタツが用意してある。座布団に坐って足を入れると、赤外線ヒーターの温もりがじんわりと伝わってくる。

「日本の電気コタツはコスパ最強！」
バックパッカーとして世界中を旅したアキラさんの結論だ。頭寒足熱、下半身さえ暖まれば、少々の寒さは耐えることができる。掛け布団にどっぷり入れば、寝ることができる。電気の使用量も少なくてすむ。薪ストーブもあるのだが、もっと寒さが厳しくなってきたら出番である。

「お待ちどうさま」
ヨーコさんがコーヒーを運んで来た。横須賀生まれの横浜育ち、ワタシが本物の港のヨーコだと言っているが、歌詞にあるアバズレとは真逆で、笑うと童女のような無邪気な顔になる。

乾燥したタンポポの根がブレンドされているコーヒーは少し苦いが、吊るし柿の甘みと相性がいい。コタツだと互いの距離も近く、話が弾んだ。

「おもしろいものを見つけたの。見たい？」
もちろんですと即答すると、店舗スペースのある部屋から、掌（てのひら）におさまるサイズの青い瓶を持って来た。一年程前から、ヨーコさんはボトルディングにはまっている。ボトルが瓶で、ディングは掘ることを意味している。古い瓶を



掘り起こして収集する趣味のことである。

まだ、ゴミの収集システムがなかった時代、集落ではハケと呼ばれるゴミ捨て場所や家庭のゴミを捨てていた。そこを掘り返して、古い瓶を収集する。駄菓子容器やインク瓶、点眼薬や水薬の保存瓶、ラムネのような飲料水等々、プラスチックが普及する前はガラスの容器が使われていた。

電灯に翳してみる。細口の瓶だが、ずんぐりとした胴のフォルムが愛らしい。手作りのささいな歪みが温かい。青色、いや蒼色のガラスの表面に、「神薬」の刻印が押

されている。

「土の中から掘りだしたんじゃないんだ。うちの親戚の廃屋から出てきた」

アキラさんが説明した。

「まだ中身が入ってたの。凄いでしょ？ 神薬、神様の薬よ」

ヨーコさんが差し出した皿には、黒い丸薬が三粒。

(正露丸?)

「うちの家には言い伝えがあつてね。不老不死の神薬がある……」

「これがそうだと思うの。ちようど三粒あるから、試してみようよ」

(いやいや、何年前の薬だ？ 不老不死？ 水銀が使われていて、それで始皇帝が死んだんじゃないか？)

ヨーコさんが手を伸ばして丸薬を一つ、つまむと、口の中に放り込んだ。唾然として顔を見守ると、表情が次第に歪んでくる。

「ちよつとトイレに行つて来る」

救急車を呼んだ方がいいのではないかと迷っていると、ヨーコさんが帰つて来た……？ 別人だった。年齢は二十歳前後だろうか。白髪混じりのグレイの髪は艶やかな黒色に変わっているが、ヨーコさんと同じ黒縁のメガネをかけている。着ている

服も、茜色のダウンジャケットにジーンズとヨーコさんと同じだ。

「効いちゃったみたい」

無邪気な笑顔は、ヨーコさんにそっくりだ。

(本物の神薬?)

丸薬をまじまじと見た。

「はい、カット!」

アキラさんがそう叫ぶと、若返ったヨーコさんの背後から、人影が現れた。本物のヨーコさんだ。

「紹介します。ワタシのかわいい姪のミヨちゃんです」

並んで笑うと、まるで姉妹のようだった。

(手の込んだイタズラだな。でも、この夫婦らしい)

「よし、四人揃つたから、始めるか」

ヨーコさんが、コタツの上のものを片づける。アキラさんが天板をひっくり返すと、緑の布が貼られた面が現れ、すぐに麻雀卓に変身。アキラさんがコタツを絶賛する理由の一つである。

ヨーコさんが麻雀牌を運んで来て、戦闘開始! アキラさんは、世界を股にかけたギャンブラーを吹聴しているが、麻雀の腕は大したことはない。強敵はヨーコさん……、ミヨちゃんの一人勝ちだった。

まちの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週日・月・火曜日
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30 (昼食休憩 12:00～12:30)

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から) ※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第五部 人物を見る

一月十六日 鑑真(がんにん) 来朝

中国、揚州江陽県に六八八年誕生し、七〇一年揚州大雲寺で出家した唐代の高僧。七〇五年に道岸から菩



薩戒を受け、七〇八年には首都長安で弘景から具足戒を受けた。そして、入唐していた我が国の僧栄叡や普照の招請に応じて渡来し、日本律宗の開祖となった。来日に関しては、第一回の計画は出国を許可されなかった。以後四回の出航は海難に見舞われ、また失明の辛酸をなめながらも、過去五回の失敗にも負けず、初志を貫き、天平勝宝五(七五三)年十二月、六回目の航海で法弟三十五人とともに遣唐副使大伴古麻呂の船に乗り、薩摩国阿多郡秋妻屋浦(現・鹿児島県坊津町)に到着した。

それから日本で鑑真は、天平勝宝八(七五六)年大僧都、天平宝字二(七五八)年大和上の号を得て、その翌年八月に唐招提寺を創建し、律宗の開基となった。日本に来航するに当り仏舎利三千粒、律天台の経典をあまり携え、書道では王羲之父子の真跡を持参して、仏教の教義や戒律と、美術界にも大きな影響をのこした。

唐彫刻の新様式を紹介し、唐招提

寺派の源流をつくった。また、菓草の知識をもって正倉院の薬品の整理をしたり、一切経の誤写を訂正するなど、日本文化に貢献した功績は極めて大きい。入滅は天平宝字七(七六三)年五月、七十七歳であった。

一月二十七日 源実朝暗殺

鎌倉幕府源頼朝の次男で、母は北条政子、建久三(一一九二)年に生誕。幼名を千幡といった。頼朝の死後、北条氏と大江広元による源家と頼朝重用者への凄惨な殺戮が始まる。

兄二代將軍頼家が建仁三(一二〇三)年に病むと、この年頼家の長男六歳の一幡は殺され、頼家は伊豆修禪寺に押し込まれた。そして、朝廷から実朝の名を賜り、政子が後見になり、時政が執権となり三代將軍実朝を擁立した。

実朝は、十二歳から二十八歳までの十七年間、將軍の虚名のもとで、政治面では源家筋最後の畠山氏は殺され、時政は失脚しその子義時が実権を握る。実朝は、朝廷側から妻を迎える。そして、一層京風を愛し、歌人として成長し、自らの家集『金塊和歌集』を上梓し、後鳥羽上皇は建保元(一二一三)年頃に極秘に宸翰(しんかん、天皇の直筆)を下した。実朝は現状に苦悶して、大船を作り

渡宋を考えたり、源氏が断絶する予感で官位の昇進を願ったりした。建保六(一二一八)年右大臣に進み、翌年正月の拝賀の儀を鶴岡八幡宮で行なうとき、甥の僧公暁(頼家の子)によって暗殺された。

二月十一日 伊能忠敬生誕

江戸後期の地理学者。延享二(一七四五)年上総国(現・千葉県)に生誕。宝暦十三(一七六三)年に、下総国(現・千葉県)香取郡佐原村の豪農伊能家の養子となる。そして、三十歳頃には家を再興し、村名主も務めるようになっていた。五十歳を越えた頃「残された生涯を学問のために捧げよう」と決心し、江戸に出て天文学や暦学の勉強を始めた。師は幕府天文方の高橋至時、暦局の間重富であった。

異例の熱意を傾けて天文、暦学に上達した忠敬は、寛政十二(一八〇〇)年五十六歳、幕命により蝦夷地の測量にのりだしたのを手始めに、文政元(一八一八)年七十四歳でこの世を去るまでの十八年の間に、日本全国を測量して歩き、『大日本沿海輿地全図』を作りあげるといふ大偉業をなしとげたのである。さらに一番大事なこと、彼が子午線一度の長さを出したことである。

ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(15)

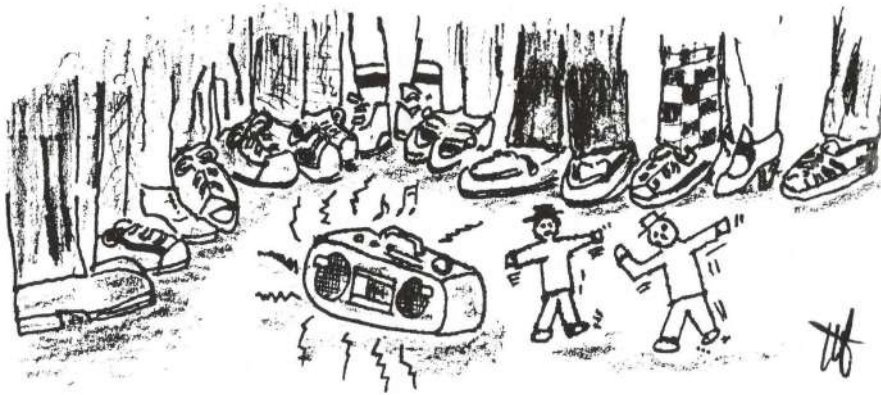
マック☆ヤマザキ

3月4日日曜日、フイレンツエ（イタリア）。“花の都”の意味と言われ、ルネッサンス（14世紀から15世紀にかけてヨーロッパで起こった「再生」「復活」を意味する文化運動）の花開いた街である。

見どころの第一に「ドウオモ」、イタリアの街を代表する教会を意味する。周りの建物に比べて驚くほど大きく色鮮やかで、“花の聖母寺”と言われている。前にある広場は若ものたちの憩いの場でもあり、活気にあふれていた。

建物の中には、ミケランジェロ作、未完成のピエタ像（十字架から降ろされたイエスキリストの亡骸を腕に抱く聖母マリア像）がある。そのドウオモの手前にある八角形の建物は、サンジョバニ洗礼堂。三つの青銅の扉のうち東の扉は、ミケランジェロが美しさのあまり「天国の扉」と呼んだのがそのまま名称になった。午前中寒かったが、精力的に出歩いた。露天商に黒人たちが多いこと

に驚く。扱う商品は「ルイ・ヴィトン」のバッグや「オメガ」の腕時計（もちろん偽物であるが）、サングラス等が手に入る。黒人たちの売り子は、



軽快に踊る「紙人形」

今イタリアで問題になっているアフリカから来た不法労働者であると、夜のテレビ・ニュースで報道されていたが、そんな黒人の売り子の多い地域が、皮肉にも観光スポットになっていた。

散策中、とても奇異な光景に出くわした。紙人形がラジオカセットのミュージックに合わせて軽快に踊っている（スケッチ画参照）。どんなトリックなのだろうと、気になりながら通り過ぎた。

ホテルへの帰り道、数十メートル先でも同じような紙人形のディスプレイミュージックが聞こえてきた。野次馬根性が首をもたげた。周囲の人垣の間を縫って、紙人形の前後左右から観察した。けれども“何の仕掛けもない”。ただの紙人形が、音楽に合わせて軽快にダンスをしている……。

値札を見ると、日本円にしてわずか500円ぐらい。勇気を出して買うことにした。まるで子供に戻ったように、小走りでもホテルにもどった。日本に帰ったら、娘たちに先ず見せて、職場の学校でも学生たちに見せるかなと、心が紙人形のように踊った。

紙袋の中の説明書を開いて見たら、信じられないような絵が描いてある。紙人形の両手から点線が伸びて、その端が人の指に結び付けられているではないか……。怒りよりも、余りにも鮮やかな“騙し”のテクニクを知りたくてホテルを出た。

紙人形は、相変わらず軽快なリズムの音楽に合わせて踊り続けている。あの説明書のように、糸を使っているのかなと思いつつ、皿のようにして人形を観察したが、糸は見えない。だったら、踊っている紙人形そのものを売ってもらえないかと考えた。しかし、先ほどは足元だけを見ていたが、踊る人形のまわりを屈強な黒人たちが囲っていることに気づいた。

この連中はグルなのだろう。返品交渉の勇気も失せて、ホテルに帰ることにした。私のそばにいた5、6歳の子供が父親にゴネていた。騙されて買った人形を「本当に踊る人形に替えてくれ」とせがんでいたが、父親はあきらめるように説き伏せている様子だった。

私の卒業旅行ツアーの学生の一人も買っていたので、「どうだった?」と聞くと、無言で苦笑。でも不思議だ! 日本に帰国してからも、その疑問は解消されていないのだ。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

冬うらからくり時計踊りだす

近藤 昌平

焼芋屋軒端を借りて九日市

原博己

湯豆腐や無事なひと日を有難く

片岡 正人

豆腐屋の笛の音年を惜しみけり

隆愚

あの顔は見ず足元に菊を置く

大槇 三代子

長き夜や放哉想い咳がでる

寺内 龍二

凍てる夜は猫になって逢いにゆく

赤川 冬人

熊とても柿栗の実を喰^はみたかろ

松岡 初枝

子づれの母は人として同じ

投稿&寄稿

候のことば

「ふろふき大根」 隆愚

暦の二十四節気七十二候で十二月七日から十一日頃を「大雪の初候」で「閉塞成冬」（そらさむくふゆとなる）、又は（へいそくしてふゆと

なる）の候といえます。空が閉ざされ本格的な冬になるという意味です。まるで天を塞ぐかの様に、重苦しい空。これが真冬のイメージかも知れません。因みに「冬日」は一日の最低気温が零度未満の日の事。「真冬日」は最高気温が零度未満の日を指します。寒くなると美味しくなるのが大

根。晩秋から初冬が旬です。江戸っ子の味は「白首大根」といわれ、ピリツと辛味が身上。甘味が強く栽培し易い事から広がっているのは、青首大根。

古事記などに登場する「おほね」が大根と漢字に当てられたのが語源だとか。寒い冬の晩には、あつあつに茹でた大根に、練味噌をつけて食べる「ふろふき大根」がおすすめ。暖まります。十二月九日は京都の了徳寺の「大根だき」の日です。

「アナフィラキシー」 赤川仁洋

草刈りの最中にアシナガバチの巣を壊してしまい、襲われた。右手の甲と親指の脇、左手の人差し指の根元、計三カ所、刺されていた。ズキンズキンという痛みに、庄原日赤病院前の休日診療所に駆け込んだ。

問診表を渡されたが、手がしびれて鉛筆が握れない。看護師さんに問診で書きとってもらい、診察を受けた。「診療費請求書」を確認すると、ステロイドと肝機能強化の合剤の注射。炎症を抑えて解毒作用を推進する作用がある。

注射が効いて、さほど腫れることはなかったが、痛みが引くのに一週

間以上かかった。そのあとは猛烈な痒み。症状が治まってもかなりの期間、違和感が残っていた。アシナガバチをネットで調べると、スズメバチに匹敵するような強い毒を持っているらしい。怖いのはアナフィラキシーショック。蜂毒のアレルゲンが生成されると、再度蜂に刺されたときにアレルギー反応が暴走して、血圧低下や意識障害を引き起こす。毎年、蜂刺されが原因で、20人ぐらいが死んでいる。

行きつけの医院で蜂毒の抗体検査を依頼、採血して外部の専門検査施設で調べてもらう。陽性だと抗アナフィラキシーの注射を携帯する必要があるが、結果は陰性。これで安心して草刈りができる？



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：12月20日(土)13時30分～15時30分

テーマ：「移住者から見た

里山の楽しみ方II」

講師：柳井 徳磨氏

(一般社団法人 中国・四国

自然文化保全研究所副所長)

場所：交通交流施設1 (JR 庄原駅隣接)

参加費：500円

(学生 200円、お茶菓子代込み)

申込み&問合せ：080-3631-9125 (やない)



「旧暦カレンダー」(販売価格：1,650円)

- ・日本の自然に根差した暦(こよみ)です。
- ・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
- ・新暦(太陽暦)も併記しているので便利です。
- ・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
- ・自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和8年度版好評販売中!

※本誌特別連載の古川行洋氏推奨。

「ぐんぐん伸びよう会」

(教室：庄原市川西町241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

黒板のない教室、学年の枠のない教室、一人ひとり自分の能力にあった内容を学習する教室

ここ「ぐんぐん伸びよう会」の教室では、ピアノ、習字、スイミング等と同様に、
一人ひとりに合った内容を学習して**スモールステップで進んでいきます。**

多くの子ども達に**「やればできる」という成功体験**を味わってもらい、
目がキラキラした子ども達で、この地域がいっぱいになってほしいと願っています。



無料体験学習受付中!!

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

編集後記

◇「木次線ストロール」の翌日に「中国5県絶景の旅」の取材も。初めめの場所なので道を尋ねたのですが、木次線も含めて三度ともわざわざ同道して案内していただきました。島根の人は本当に親切です。ありがとうございました。

◇中学時代の同級生が帰省、どら書房を訪ねてくれたのですが、お互い老化や病気の話が多かったですね。老後の不安も大きいですが、社会の転(くびき)から開放されて時間が自由に使える「黄金期」、大いに楽しみましょう。

◇山の紅葉がきれいですが、短い秋が駆け足で通り過ぎて、急に寒くなりました。去年故障したストーブを修理せねば(苦笑)

第290回

くんちいち しよっぱら九日市

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



◇OZ・ミニライブ◇
※ギター弾き語り

10時～30分 場所:内海宅

12月9日(火)

9:00～13:00

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
12月8日（月）～10日（水）10時～16時
「わら細工・高齢者手作り作品展」

★HONMACHI STAND→コーヒー 100円引き

★どら書房、無料休憩室（漫画読み放題）あります。
コーヒー 100円

★あなたも自分のお店を出してみませんか？（出店者募集中！）

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～
九日市愛好会事務局 FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10（楽笑座内）

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

